

# 太宰府の文華く公文書館だより 141

## 公文書館にあるモノ資料―

### 水閘土管すいこう

ページID：7241

太宰府市公文書館が所蔵している資料は、ほとんどが文書、つまり紙の資料になります。いわゆるモノ資料もあります。今回紹介するのは、『太宰府市史 環境資料編』にも登場する「水閘土管すいこう」です。

重さは7キログラムちょっと、高さ43センチの素焼きの円筒で、両側には互い違いに短い管が突き出ています。これは、熊本県出身の富田甚平とみたしんが明治期に確立した「富田式暗渠排水法あんきよ」による、土地の水はけを良くするための装置の重要パーツです。土中に設置し、左右の管を長い円筒に繋げ、上部には排水を調節するための蓋を取り付け、蓋に括り付けた針金を地上から上げ下げして水の供給をコントロールする仕組みで、今も使われている技術です。

この土管は高雄地区で使われているもので、上部に大きな欠けがあることから、新しいものと取り替えられ役目を終えたのでしょう。かつて高雄地区では評判の良いコメが収穫されていたそうで、それもこの水閘土管を使った暗渠排水のおかげと思

われます。高雄は元々、ジルタ・フカタ・ムタと呼ばれる、湿度が非常に高い地質を持った土地でした(『市史 環境資料編』)。富田式暗渠排水法が取り入れられた時期は定かではありませんが、明治42(1909)年の新耕地整理法で補助対象事業に暗渠排水が付け加えられ、耕地整理組合を置くことが規定されたため、太宰府でも大正8年頃から組合が組織されました(『市史 近現代史Ⅲ』)。

大正末から昭和初期にかけて2度の耕地改良をやったという情報もあり(『市史 民俗資料編』)、公文書館が所蔵する「有吉家文書」にも、「筑紫郡太宰府町第一耕地整理組合」の高雄地区の図面が5点残されていることから、新法の制定をきっかけに高雄の水田改良が行われていったと考えられます。

不思議な形をした土管から、歴史の諸相が見えてきます。



水閘土管

太宰府市公文書館

藤田

理子